

外務大臣賞

「日本における豊かさとは？」

ラリット マヤ マハット

Ms. Lalit maya MAHAT

(ネパール・主婦/通訳)

憧れていた日本のお嫁さんとなり来日。言語と文化という大きな壁のために孤独感を覚えつつも日本語を猛勉強し、今はネパール語を教えている。双子のママとなつてからは、日本人との交流の輪も広がり、自分の居場所を感じられるようになった。



私はヒマラヤの国ネパールから5年前に日本人の花嫁としてやって来ました。「日本のような豊かな国へお嫁に行くなんてあなたがうらやましいよ。」私の友人はよく言っていました。はるか遠くの見知らぬ国での新しい生活の始まり、心の中は期待半分、不安半分でした。

日本は、ネパール人にとって夢の国で、その豊かさに皆憧れています。ネパールのテレビに映る日本は、人間が誇る最新文明そのものです。東京、新宿の天に突き刺すような高層ビル、時速 300 キロで走る新幹線や迷路のような自動車道路そして蟻のように働く人々などその例です。

結婚後、初めて夫の住むマンションへ行き部屋の中を見渡すと電気、ガス、水道、電話などのライフラインはもとより、テレビ、冷蔵庫、洗濯機、掃除機、電子レンジ、パソコン、エアコンなど日常生活をより便利、そして快適に暮らせる設備が備わっていました。ほとんどのネパール人にとって不可能に近いこのような贅沢が、日本ではごく当たり前にあることを肌で感じました。その時、私はベランダに置かれていたいくつかの大きなポリ袋のゴミに気がつきました。そんなに大量のゴミはどこから来たのだろうと私は不思議に思いながら夫と買い物に行きました。マンションの隣にあるスーパーでお弁当や飲み物のほかインスタント食品などを買いました。部屋へ帰ってきて食事を終えると、割り箸やペットボトルそして、まだ見えそうなお弁当箱などたちまちゴミがいっぱい出てきました。「なるほど、買い物したものの半分はゴミだったんだね！」私は納得しました。豊かな国日本ならではの、ものの消費力と廃棄率には驚きました。

ネパールでもごく一部の人々は日本人に近い裕福な暮らしをしています。しかし、大半の花嫁は、毎朝家族のだれよりも早く起き、料理などに使う飲み水を1時間もかけてくみに出かけ、10 キロもの重さの桶を体に担いで家まで運びます。食事を作る時に使う燃料の薪は遠い森まで行かないと取れません。花嫁は、水くみや薪取りなどのこうした家事を村の他の女性達と集団になってすることが多いです。新米嫁は、集団の中で他の女性達に泉まで案内してもらったり、枯れ木の枝を一緒に集めながら女同士の話などして自然に仲間入ります。日常生活を通じてお互いにふれあい親しくなっていくのです。

私の夫は、毎朝早く出勤し、帰宅は真夜中でした。私は、名古屋の大都会にあるマンションの大きな部屋の中で一人ぼっちでした。隣の奥さんに数日前挨拶したきりで、それから会う機会はありません

んでした。「結婚は何年目かな？」とか子供の泣き声が聞こえてくると「風邪を引いているのかな。」とか「色々話しをしたいな。」と一人で呟いていました。「隣の奥さんと友達になれないのかな。」私は寂しくなりました。家事は、便利な家電などのおかげで大した時間も労力もかかりません。蛇口をひねれば水がでます。コンロのスイッチを押せばガスが付きます。ネパールのように集団で水くみや薪取りに行く必要もありません。私は、何もやることが無く、これから先日本でなじんで行けるか不安にもなりました。ベランダから見える道路を眺めているとピッポーピッポーと横断歩道の青信号を告げる音がむなしく響くばかりです。急いで渡る大勢の人を見ながら私は、叫びたい気持ちになりました。「誰か私の友達になってよ。私の話を聞いてよ。」豊かさの裏側に隠れていた寂しさや孤独との辛い戦いの日々でした。

それからしばらくして私は、夫とともに彼の地元奈良に引っ越してきました。ある日、私は赤ちゃんを授かったことを知り、地域の保健機関で行われる母親学級に参加しました。そこで同年代の沢山の女性と出会うと「双子ちゃんですか。大変だね。」と皆、私に話しかけてくれました。新米ママ同士で、体のことやこれからの子育てのことなど沢山の話をすることができました。出産してから、近所の人や知り合いなど沢山の人がから出産祝いを頂きました。家に中ばかり籠っていないで公園などへ散歩に出ると、同年代の子供を持つ近所の人とふれあいが広がり、相談に乗ってくれるお母さんも増えました。双子の世話で疲れて私が寝込んでいた時、おかずを持ってきて面倒を見てくれる人もいました。先輩ママは、ベビーベッドや赤ちゃん服を譲るなどして物の大切な使い方を教えてくれました。私は、こうした優しさにどれ程心が和まされたのか言葉では言い尽くせません。

人間は、物の無い生活に苦しんでいるとき、豊かさをひたすら求め続けます。そして、物の豊かさを手にすると心の豊かさを失いがちです。日本も結局そうではないかと一時私もそう思っていました。しかし、それは誤解でした。大半の日本人は、物の豊かさを手にしても、『持ちつ持たれつ』と、人との和の大切さを忘れていませんでした。日本社会に溶け込みたいと願っていた私を、外国人であっても受け入れ、その立場を尊重し、思いやりを持って接してくれました。おかげで私は、日本の文化を理解し、それに従いながら花嫁として、母親として、日本社会の一員として生きていく自信が付きました。私を寂しさから救ってくれたのは、争いを避け、誰とでも仲良く和やかに暮らして行こうとする、日本人が古くから持っていた『和の精神』だったのです。そして、この『和の精神』こそ、日本人が持っている心の豊かさで、忘れてはならない財産であり、日本における本当の豊かさに違いありません。